

英語コミュニケーション能力向上のための指導について

樋口 美香¹⁾・平野 美津子²⁾

The Teaching of English Communication Skills

HIGUCHI, Mika and HIRANO, Mitsuko

1. はじめに

短期大学生に向けて、スピーキング、ヒアリング能力をを向上させる指導を行うに際し、どのようなメソッドを用いるのが効果的かを考察するのがこの指導のテーマである。

短期大学生の多くの場合、基本以上の文法力や読解力を中学・高校における英語の授業で習得している。しかし、大体において学生はスピーキング・ヒアリング、つまりコミュニケーションの力はかなり不足していると思っており、実際にもそのような状態を呈する。彼らが知識として得ている英語力を実際の運用につなげるには、効果的なメソッドがあるはずである。また一方で、知識としての英語力を実際の運用へと結び付けることを阻む何かがあると考えられる。この小論では二点に関して検討、調査、実践したクラスの状況について述べていきたい。

2. 予備調査について

スピーキング・ヒアリング能力に焦点を置いたクラスを開始する前に、「何が英会話力・発話活動を促進する要因となるか」について学生に対しアンケート調査を行った（回答者35名）。この中で特に顕著であったことは、91%が「間違いを気にしなくてよい雰囲気のあるクラス」が望ましいと答え、またこれらの能力を身につけ、伸ばすには「意欲」が必要であると51%が答えたことである。

このように、「間違いを気にしなくてよい」、「英会話力を伸ばそうという意欲を持つことができる」という二点を満たした教室を準備することが、教員にとっての最初の課題となった。同時に指導上留意しなくてはならない事柄は、学習者たちが（短期大学生と言えども）成人であることである。英会話のクラスでは、大人としての彼らの心理をよく汲み取らなければ円滑な指導や授業運営は困難である。

3. サジェストピディアの適用

サジェストピディアというメソッドの特徴は、暗示を効果的に使用して、学習者から不安や緊張を取り除き、精神を学習に集中させることにある。成人学習者には、恥じの意識、言い間違いや失敗に対する不安が大きく、それを回避するために沈黙してしまう傾向が強い。これでは発話活動はできないので、第一にはリラックスできるクラスをセッティングすることが肝要となる。その中では、学習者たちが精神的バリアーを消し、オープンな状態で授業に臨むことができるようにするのである。

4.1 幼児化と new names

オープンな状態とは、サジェストピディアの場合、精神が幼児のように素直で柔軟な状態になることであり、潜在能力を活かす効果的な手段である。短期大学生を幼児化へと促すメソッドとして、参加学生（2クラス、計49名）にクラスで使用するためにそれぞれ英語の new names を持ってもらうこととした。名前の見つけ方は、教員が用意したリストから選んでもらう、あるいは学生に好きな名前があればそれをつけてもらった。授業中での呼びかけは、教員から学生へ、あるいは学生間でもすべてこの new names で行った。

new names に伴い、fictional identities も持ってもらった。つまり現実の自分とは全く異なる住所、職業、趣味を作り上げてもらい、授業における会話練習などで使用してもらうのである。new names, new identities の理論的な効用としては、現実の自己に執着しなくてよいため、発話の際の失敗も普段の自分のものとはならない。これは、学習者が安心感を持つことにもつながる。自分がこのクラスに限って演じている他人のものであるので、気にしなくてよいことになる。外国語を使用する、とくに話すにあたっては、失敗は必ず生じるものであり、いちいち気に病まずに、どんどん進めて行くことは望ましいといえる。また、指導したクラスは看護学科1年生と食物栄養学科2年生であり、お互い同士、実際上の現在における活動、将来への展望など似通っていることが少なくない。そのため、fictional identity として自由に新しい自己を作り上げて会話練習に盛り込んで行くことは、よりこの練習を楽しく活性化させることにつながった。

4.2 幼児化、new names と教員の役割

幼児化という心理作用を利用しながらの指導を円滑に進めるためには、何よりも学生が十分に教員を信頼することが肝心である。その一助として、今回の授業では助手が学生と同じように new name, identity を持ち、率先した役割を持った疑似学生として学習者たちに対応し、活動に参加した。もちろん、学生はその人が助手であることを判っている。しかし、自分たちが指示されている活動の目的をよりよく理解したり、活動内容に対する不安・疑問を払拭することができたと考えられる。指導的な役割を持つ教員と、補助的・コーディネーターの役割を持つ助手とが連携した点で、学習を促進するための幼児化がスムーズに徹底できたと考えられる。

4.3 幼児化におけるゲームや歌の利用

英語の実践的な運用能力を見につけるにあたっては、ゲームや歌の利用が効果的であることは一般によく知られている。クラスの運営として、それぞれのクラスを3～4人ずつの小グループに分けた。そして授業の最初に ice break として手拍子を打ちグループの仲間の new names を呼ぶというゲームを行った。お互いに顔見知りであっても、英語の new names で呼び合い、しかもそれを正しい英語の発音でということであり、ice break としての機能も、new names に慣れ親しむことにも、英語での発話練習の第一歩としても功を奏した活動であった。

また例えば、direction の表現や聞き取りを体験させるために、クラス内ですごろくゲームを行ってみることは実際に効果的である。しかしながら、二十歳かそれに近い年齢の学習者にとっては、すごろくゲームそのものは幼稚である。その際に、new names, new identities で新

しい自分、幼児のように柔軟でオープンな性向を持ってもらえば、抵抗なく参加させることができ、好評でさえあった。

歌の利用は、一般に日本人が苦手とする発音、イントネーション、リズムの問題を改善して行くために大変に役立つ。特にマザー・グースなどの童謡は短く、詩としての形式も整っているため、利用しやすく有用であると考えられる。しかしここでもまた、提示の仕方に注意を払わなくては、成人の学習者にとってはあまりにも子供じみた内容となってしまう。学習的な意義において幼児化が行われていれば、成人学習者は素直にこのような教材を受け入れ、その意図を理解し、取り組み方がスムーズで、学習内容の受容が高まった。

4.4 new names and identities への学習者の反応

95年度年度末に受講生計49名に対してアンケート調査を行った。そのうちの new names and new identities に関して述べてみたい。まず、全員が new names and identities を用いた授業の運営を「よかった」と答えた。さらにその理由を複数回答可として答えてもらったところ、多い順に「英会話用のクラスの雰囲気になりやすい」27%、「珍しくおもしろかった」17%、「子供の“ごっこ遊び”にも似た気楽な空気になる」14%、「グループで作ったスキットに自然に自分が織り込まれる」14%、「英会話専用の名前を持つことで、あまり考えすぎることなく気楽に英語で発話することができる」13%、「違う呼び名を持つことで、普段の自分にこだわらなくてよい」7%、「英語を生活用語としているような気持ちになれる」5%、「積極的に発話活動に取り組むきっかけとなった」3%、であった。以上を見ると、概ね短期大学生は new names and identities を使用したクラスを受け入れ、楽しむことができ、よってここから生ずる幼児化や受容性の学習効果を期待できると言える。

5.1 発話活動の指導について

実際の発話活動の指導については、教科書は Regents / Prentice Hall 発行、*Spectrum level 1* を用いた。この本はコミュニケーション・スキルの上達を目的としたものであり、対象学習者としては成人、特にいわゆる“false” beginners を設定している。これらのことから、初級教科書としてはダイアローグの量がかなり多い。またヒアリング練習にも多くが割かれている。

5.2 ヒアリング練習

教科書を用いての最初の学習としてヒアリング練習を行う。この授業の実施教室が L.L. 教室であることから、この面の指導はとても効果的に行われた。穴埋め形式の問題練習のほか、L.L. の機能を活かして、モデル・ダイアローグに続いて個別に発音練習をし、それを直後に自分で聞いて確かめる、またはインターカムを使って個別に指導ができる。この練習により会話における自然な速度やイントネーションを身につけて行くことができた。

5.3 母国語の役割

ダイアローグについては、単語や語句の言い回し、内容の説明などは教員が日本語を使って行った。不明点を解消することは学習に対する不安感を除去し、学習者の精神面にも内容の促進にもそれなりの効果があるからである。学習者が成人の場合、特に不明点をそのままにして

しまうことは心理的バリアーにつながる恐れがあるので、補足的にはあっても学習者の母国語での説明はかえって内容の理解度を増進し定着させるはたらしきがあると考えられる。

5.4 スキット作成

ヒアリング練習で一度学習したダイアログの中から、教員がモデル・スキットを選ぶ。学習のターゲットとなっている表現は活用するように指示するが、スキットの場面設定や細かな内容は各グループに新たに創作させ、それぞれ独自の内容を盛り込むように指導する。モデル・スキットは存在するがこの新しいスキット作成、あとにつづくスキットの実演（この授業では“acting out”と呼ぶ）は、サジェストピディアのメソッドにおいては dramatization という指導法に類する。教科書のモデル・スキットを土台にした小スキットの作成は寸劇作りと言ってよい。スキット作りには授業時間中にある程度の時間を設け、教員は学生からの語句や言い回しの質問に応じる。

5.5 Acting Out

それぞれのグループが作ったスキットを教室の前で全クラスに向かって実演 (act out) する。椅子や机など簡単な道具は教員側で用意したが、それぞれに必要な小道具を準備しているグループもあった。先にも述べたように、スキットに登場するのはクラスのために用意した new names and identities の人物であり、それぞれの人物の設定は多様であった。学校・職場の友人関係という設定が比較的多かったが、姉妹・家族とするなどの工夫も見られた。このように、また先のアンケートからも見られるように、学習者たちが自分たちの独自性を織り込んでスキットを作り上げることに楽しみや意欲を示すのは、喜ばしい発見であった。とかく日本人の外国語学習者は引込み思案で表現したげらないという説は間違いであると言える。とても慎重で、かつ完璧主義的傾向の強い成人学習者を指導する際には、心理的バリアーを取り除くこと（この授業ではサジェストピディアにおける幼児化が効果的だった）、彼らが元来持っていると思われる自己表現の欲求を表に引き出すことが大変に重要であることを再認識した。

5.6 Acting Out の評価、及びエラーの取り扱いについて

評価については教員側からと学生相互間との双方で行った。まず学生相互間においてであるが、スキットの内容が伝わったか、スキットの内容は工夫されていたか、声は大きく聞き取り易かったか、表情やジェスチャーが豊かであったか、聞き取り易く正確な発音・イントネーションであったか、スキットの内容におもしろさがあったか、の6項目において5点満点で採点させた。相互採点作業の長所は、他のグループの実演を熱心に見るようになること、また他のグループから良い表現や設定、アイデアを発見しようという態度が促されることである。この学生間評価と教員側の評価を照らし合わせることは、その後の指導の材料ともなる。学生が作成したスキット中のエラーであるが、実演の最中には注意を与えない。実演後に軽く行う。例えば学生が言い間違えた部分を正しい文法、あるいは抑揚で言い直す程度である。これは学習者を萎縮させないためである。実演直後の講評は、良い部分を褒め、努力をねぎらい、教室全体で拍手をして終了する。学生の積極性を持続・進展させるためである。また、Acting Out は助手がビデオ撮影をし、翌回の授業において全員で鑑賞する。このときには時

間も経過しており、エラーを犯した学生も自分への詳細な指摘をスムーズに聞き入れる余裕が生まれている。

5.7 Acting Out に対する学生の感想

ここで、Acting Out に参加した学生達の感想をアンケート結果から探してみたいと思う。

【イ】「グループ毎のスキット作りについてどうでしたか。」という問いに対しては(複数回答不可) 多い順に「楽しく充実していた」28人・57%、「楽しかったが内容的な充実が今一步だった」21人・43%で、「楽しくはなかったが、よい内容ができた」「楽しくもなく、内容あまり充実していなかった」はゼロだった。

【ロ】「楽しかった点は何ですか。」という問いに対しては(複数回答可) 多い順に「適当な場面・筋を思いつくこと」32%、「グループで新しいスキットを作り出すこと」29%、「自分たちの個性を出すこと」24%、「モデル・スキットの語句や言い回しを考えること」10%、「用いたい語句、言い回しを調べること」5%であった。

【ハ】「楽しくなかった点は何ですか。」という問いに対しては(複数回答可) 多い順に、「なし」50%、「グループ内で話し合う時間が持てなかったこと」19%、「用いたい語句・言い回しを調べること」15%、「スキットの語句や言い回しの応用を考えること」6%、「その他」6%、「グループ内での意見がまとまらない、協調性がないこと」4%

【ニ】「あなた自身の実演・発表についてどう思いますか。」という問いに対しては(複数回答可) 多い順に、「緊張した」38%、「照れ臭さや恥ずかしさがあった」20%、「楽しかった」19%、「難しかった」7%、「人前で言うことで得る物があった」7%、「充実・達成感があった」7%、「つまらなかった」2%、であった。

【ホ】「クラス・メートの実演・発表を見てどう思いましたか。」という問いに対しては(複数回答可) 多い順に、「楽しかった」66%、「勉強・参考になった」34%、であった。

このような学生からのアンケート結果から見られることは、やはり自分たちの独自性・カラーを織り込んだスキットを作成し、表現することに楽しみを見いだしていることである。反面、緊張や、照れ臭さはおそらくビデオ撮影のためであろう。この授業運営の大きな目的である「緊張・不安を取り除く」という主旨からは大きく外れている。しかし、ビデオ・テープに収めることで、学習者自身が自らの発話行動を振り返ることができる。会話・寸劇は瞬間的に消えてしまうものであるから、ビデオ収録があってこそ、後の教員側の丁寧な講評や指摘を行うことができる。そのため、ビデオ撮影は必要な行為だと思っている。だが、これが学習者たちに緊張感を呼び起こす行為であることがあきらかになったので、ビデオ撮影の位置付けをより正確に学生に理解してもらい、また何らかの措置を講じて、心理的バリアーを除いていくように努めなくてはならない。また、辞書などを使って調べるといった行為は語学学習の基本である。サジェストピディアのメソッドにおいては、これは比較的重要度が低いが、適宜おろそかにしないように指導する必要があると思った。

5.8 Acting Out の紙面での講評

Acting Out に対するフィードバックをより確実なものとするために紙面での講評を行った。サジェストピディアというメソッドには、コミュニケーション・スキルに重点を置き、話されている内容全体の理解を目指しているため、文法や発音の細目にはおおまかになりがちな傾向

がある。これは大切なことではあるが、口頭での説明に加えて、目立ったエラーには文字に起こした説明も必要だと感じられたからだ。また、グループによっては難しい単語や言い回しを使用する場合があります、他の学習者に完全に別のグループのスキットの内容を知ってもらうためにも紙面における説明は重要だと思われた。ただし、学習者の意欲を増進するため、紙面においてもエラーの指摘は正しい文法への書き直しにし、ますますの積極性を奨励する内容とした。この授業ではこの紙面を“Act Out Review”と呼び、執筆した助手としては自らのクラスのコーディネーターとしての役割を学生たちに対してより明確化したいという意図もあった。学生からは概ね好評であった。アンケート結果では複数回答可で多い順に、「語句・言い回しの復習になる」21%、「他のグループのスキットの内容が確認できる」21%、「自分たちの寸劇に対する教員からの感想や批評を知る媒体となっている」21%、「その課の全体的なおさらいとなる」18%、「自分たちの活動に対するフィードバックとなっている」13%、「学生と教員との距離を無くす、あるいは縮める役割がある」6%、であった。紙面での講評は有効な媒体であると認識できた。

6. 結 語

このようにして、サジェストピディアのメソッドにおける幼児化、受容性、ドラマ化（本授業ではスキット作成）を柱に1年間の授業を実践した。学生には概ね好評で、授業後の感想には楽しく取り組むことができた、充実していたという声が多く聞かれ、積極的な意見が大多数であった。このメソッドの特質として文法の細目にはあまり留意せず、コミュニケーションとして会話内容の大枠を捕らえて発話活動を行うことが重要とされている。この考え方はたしかに的を得てはいる。しかしそればかりで、厳しい見方をすれば“false” beginner 状態にとどまりやすい、日本人の短期大学生の指導には不十分な点も少なからずあると思われる。スキット作成の際にはこれまでのように自由で独自の場面設定などを奨励する。と同時に、サジェストピディアとは逆の立場を取るようであるが、スキットを書き起こすときには丁寧に辞書を調べること、文法事項のあいまいな点は教員に尋ねてもらい、正確な文章を組み立てるように指導することを心掛けねばならないと感じる。一方で、今回私たちが力を注いだスピーキング・ヒアリングの面での発達は目覚ましいものがあった。Acting Out では回を重ねるごとに自然な発音・イントネーションが身についていき、ジェスチャーも活発になっていった。これらの成果を踏まえ、サジェストピディアのメソッドをより学問的・理論的に追求し、かつある意味では特殊な状態である“false” beginner としての成人日本人学習者に必要なプラス・アルファの指導を考えていきたい。

【註】

- 1) 静岡県立大学短期大学部助手
- 2) 聖隷学園浜松衛生短期大学教授

【参考文献】

Cook, V. (1991) *Second Language Learning and Language Teaching* (London: Edward Arnold)

- Gołbiewska, A. (1990) *Getting Students to Talk* (Hertfordshire: Prentice Hall International)
- Krashen, S.D. (1988) *Second Language Aquisition and Second Language Learning* (Hertfordshire: Prentice Hall International)
- Larsen- Freeman, D. (1986) *Techniques and Principles in Language Teaching* (Oxford: Oxford University Press)
- Stevick, E.W. (1982) *Teaching and Learning Languages* (Cambridge: Cambridge University Press)
- Wingate, J. (1993) *Getting Beginners to Talk* (Hertfordshire: Prentice Hall International)

[1996年10月20日受理]

